

各々進ませると云ふ教へ方だつた。これは餘談だが、魚目子巻ななこ（彫金の一部）は緻密な仕事で女子に適するから學校に女子部を増設したら良からうと云ふ意見を持つて居られた。

現在帝室博物館にある先生の作品で、月と雁を鐵板に刻つたものがある。此れを製作される時は實に苦心されて、材料が鐵の爲一本の線を彫るにも、鑿がかけて度々研かなければならなかつた。そこで當時學校に櫻井正次と云ふ刀劍鍛冶が居たので、その人にたのんで良く切れて齒こぼれのしない様な鑿を作つてもらつて、初めて作品を完成する事が出来たとの事だ。

私が研究科へ入つてから約一年半程で先生は病の爲遂に他界されてしまつたが、其の御病床にある時、毎週二度づつ必ず作品を持つて行かぬと非常に御氣嫌（機）が悪かつた事をもつてみて、如何に先生が後輩の指導に御熱心であられたかを充分に知る事が出来ると思ふ。

先生は良くこんな事を言はれた「わしの叱言が續くか、君達の根氣が續くか」と。此の言葉によつて我々は何時も勵まされて居た。又生徒に鏝を彫らせても決して完成させずに、中途で仕事を止めさせた。それは生徒を思つて下さる深い心からの爲であつて、若し完成させてそれを金にでもする様な事があつては、前途ある學生が道を踏みはずす元になると心配されたからであつた。又出席簿を御覽になつてこんなものは不要だと言はれたが、それもその筈、先生は毎週お見得になつて、我々の仕事を一見されれば、なまけてゐたか何うかが直ぐ分る事で、生徒の方もなまける處か朝夕少くとも一時間づゝは必らず餘分に

頑張つて居た。或る日先生が小刀柄こつぱを二本我々に見せて其の優劣を問はれた時、私はAを友人Bはを良いと言つたそこで先生曰く「此の二本は何れも立派な名作で優劣は無い。而し、Aの作者は努力によつて此の作品を生むまでに至つた人であり、Bの方はすぐれた天分によつてこゝまで達した人である。名人は前者と後者が一体となつて初めて生れるものだ。君達は何時もう努力する事を忘れてはならない」と。これを聞いた時、私には非常な勇氣が湧き「努力すればなんとかなる」と言ふ自信を持つた。

休暇になると教室が使へないので、先生は研究科の生徒達を御自宅に呼ばれ、生徒は各自押木を持參して、學校と同じ様に休まずに勉強する事が出来た。

自分を空しくして、ひたすら先生について勉強する事が出来た我々は誠に幸福だつた。

先生の御親切が今もなほ身にしみる。 以上

九月十九日

〔加納夏雄先生の事〕清水亀藏談『東京美術學校校友會誌』

第十九号。昭和十五年十月）

鑄金科

鑄金科の指導教官は岡崎雪声、大島如雲、杉浦瀧次郎らであつた。同科の実習科目には「工場実習」、「造型」、「繪画」、「鑄金図案」、「蠟型」があり、「工場実習」が鑄造の専門技術を教える最重要科目で時間数が最も多かつた。ただし、同科の場合、「造型」、「繪

画」にも割合多くの時間をあてており、そこに鑄物職人ではなく芸術的センスのある鑄金家を育成しようとする方針が窺われる。鑄金教育には特別の設備が必要であるが、明治二十四年ごろまでに本校裏門のあたりに鑄物工場（五十六坪）と仕上工場（七十坪）が作られた。これは本来依嘱銅像の鑄造のために作られた設備であったが、「工場実習」の授業もここで行われたらしい。

「工場実習」の教程に関する資料はやはり「第一回生徒成績物展覧会出品目録稿」である。それを左に掲げるが、この教程で使用されたと考えられる手本用の地板や生徒の習作も多少本学に残っている（『東京芸術大学芸術資料館蔵品目録 金工Ⅱ』参照）。

鑄金標本目録

垂花紋並ニ丸形地紋板	一枚
半肉立浪地板	一枚
薄肉雲紋地板	一枚
全 黄蜀葵地板	一枚
全 松ニ鷹地板	一枚
筒形地紋筆筒	一個
無紋細口花瓶	一個
袋足香炉	一個
青海波模様花瓶	一對
長方形水盤	一個
方形生底花瓶	一個
兔置物	一個
岩上観音置物	一個

鑄金標本説明

三ヶ年間で以テ鑄金ノ法ヲ習得セシムルノ標本ニシテ年別ヲ以テ之ヲ説明スレハ左ノ如シ

第一年

垂花紋並ニ丸形地紋板

初テ鑄造ヲナサシムルノ標本ニシテ先ツ古代模様等ヲ鑄ルノ

法ヲ習得セシム

半肉立浪地板

半肉ヲ以テ模様等ヲ鑄出スルノ法ヲ習得セシム

薄肉雲紋地板

全 黄蜀葵地板

全 松ニ鷹地板

薄肉ヲ以テ模様及草木鳥類等ヲ鑄出スルノ法ヲ習得セシム

右ノ法ヲ習得シタルノ後各自ノ意匠ヲ以テ半肉薄肉等ニ就キ

新作セシム

第二年

筒形地紋筆筒

初メテ器物ヲ作ルノ法ヲ教フルモノニシテ最モ簡易ナル筒形

ヲ作り之レニ模様ヲ鑄出スノ法ヲ習得セシム

無紋細口花瓶

袋足香炉

青海波模様花瓶

既ニ習得シタル模様ヲ付シ円体器物ヲ鑄ルノ法ヲ學ハシム

長方形水盤

方形器物ヲ鑄ルノ法ヲ習得セシム

右ノ法ヲ習得シタル後各自ノ意匠ヲ用テ器物ヲ新作セシム

第三年

方形生底花瓶

兔置物

岩上観音置物

器物動物人物佛像等〔まるがき〕全鑄ノ法ヲ習得セシメ及ヒ此法ヲ應用シ

各自ノ意匠ヲ用テ丸物ヲ新作セシム

鍛 金 科

鍛金科は明治二十八年九月に開設され、囑託教師桜井正次、平田宗幸が指導にあたった。前記の「第一回生徒成績物展覧会出品目録稿」は同科が開設される前に作成されたもので、同科については次の記述があるのみであって、教程は把握できない。

鍛金標本目録

- 無紋銅器 一個
- 唐花彫銅器 一個
- 靈芝鈕鉄香炉 一個
- 鍛金順序 七個
- 鍛金道具 一式

鍛金標本説明

金属ヲ鍛鍊シテ之ヲ打出シ諸種ノ器物ヲ作ルノ順序ヲ示スモノナリ

第一 地金

第二 地金ヲ切りタル処

第三 打始メ法

第四 打出シ法（其一）

第五 同 （其二）

第六 形ヲ取り始ムル処（其一）

第七 同 （其二）

第八 前方法ニ依リ打上ケタルモノニテ素銅色ヲ付ケタルモノナリ

第九 前ニ全シク彫刻ヲ施シ火色ヲ付ケタルモノナリ

第十 前ニ全シク鉄ヲ用キテ新案シ彫刻ヲ施シテ後鑄（せ）ヲ付ケタルモノナリ

ただし、本学芸術資料館所蔵の手板（毛彫、鋤彫、打出等の手本）や器物の手本によって教程の一部を知ることができる。

漆 工 科

岡倉寛三は漆工教育の開始にあたって教師の人選に苦慮した様子である。例えば次のような話も伝わっている。

……東京美術學校に漆工科をおかるゝや、時の學長岡倉寛三氏人を介して泰眞を招かれしも、かたく辭してつかず、余は一箇の蒔繪師のみ、いかでか人に授くる才學あらん、又これを教ふる術を知らず、さりながら余の業を職として學ばんとする者は余が工場に入るを拒まずと。岡倉氏これをきよてしふること